

初期ヘレニズム時代エジプトにおける体育競技会 — 「バシレイア競技会優勝者録」碑文を中心に —

波 部 雄一郎

1977年に公刊された「バシレイア競技会優勝者録」碑文は、紀元前268年におけるプトレマイオス2世の誕生日を記念して中部エジプトで開催された体育競技会の記録である。同碑文には、各種目の年齢部門別に優勝者とその父の名、そしてエスニシティが記録されている。つまり優勝者たちは、ヘレニズム時代にエジプトへ入植したギリシア・マケドニア系軍事植民者やその子弟たちということになる。

本論文では以上の前提にもとづき、まず「バシレイア競技会優勝者録」碑文のテキストにいくつかの注釈を加えた上で、バシレイア祭をプトレマイオス朝による国家祭祀のひとつとして、同競技会がプトレマイオス朝の王国支配において果たした役割について考察する。また、優勝者についてプロソポグラフィカルな分析を行い、エジプトに入植した軍事植民者の社会経済的な動向を考察する。なかでも、数多くの優勝者を輩出したトラキア人入植者に着目し、この碑文が建立された背景を明らかにする。

また、バシレイア競技会の競技種目、各種目の年齢部門の区分について、同時代のオリュンピア競技会などのギリシア各地の種目と比較・検討し、初期ヘレニズム時代のエジプトにおける文化的状況を、プトレマイオス朝の文化政策と関連づけながら考察する。

はじめに

エジプト中部から出土したとされる碑文は、プトレマイオス2世の治世第18年マケドニア暦デュストロス月12日（紀元前267年3月18日）に、王の誕生日を祝って開催されたバシレイア祭の体育競技会（以下、バシレイア競技会）の各競技の優勝者を記録したものである¹⁾。碑文には競技会の日付とその主催者に続き、優勝者、その父名（patronym）、そしてその出自が記録されている。同碑文は紀元前3世紀前半のエジプトでギリシアの体育競技が行われていたことを示す貴重な証拠であり、ヘレニズム時代のエジプトにおける「ギリシア化」を示す史料のひとつとして理解されてきた²⁾。

同競技会の優勝者たちは、紀元前3世紀のはじめまでにエジプトに入植した軍事植民

者 (klerouchos) たちや、その子弟であったと考えられる。マケドニア人とギリシア人をおもな支配層とするプトレマイオス朝は、エジプト支配を円滑に進めるためにギリシア世界からの入植者を勧誘した。軍事植民者たちは、彼らの出身を示すエトノス (民族) 名や都市名を名前や父名とともに公文書に記載したが、この習慣は彼らの子孫にも受け継がれ、アイデンティティとして継承された³⁾。そのため、バシレイア競技会はエジプトのギリシア系入植者にとって、彼らのアイデンティティの場と見なすこともできる。

ただし、古代ギリシアの体育競技については近年多くの論考が発表されているものの、同碑文については、ケーネンによる校訂の公刊以降、包括的な研究が行われてきたとは言い難い。その理由は、同碑文がエジプトという新たに「ギリシア化」された地から出土したために特殊な事例と認識されたためであろう。また、同時代のエジプトからの体育競技に関する史料が、わずかししか確認できないという事情もあろう。

本稿では、バシレイア競技会優勝者録碑文について、碑文の校訂を見直し、それによって、初期ヘレニズム時代のエジプトにおける体育競技をめぐる状況を解明したい。同時に、バシレイア競技会がプトレマイオス2世の誕生日を記念して開催されたという点に注目し、体育競技会を通じたプトレマイオス朝の軍事植民者の統制と地域支配についても考察を試みたい。

1 バシレイア競技会優勝者リスト

バシレイア競技会優勝者リストは、1963年にカイロの古物店でたまたま発見され、カイロ考古学博物館が購入し、現在は同館に所蔵されている⁴⁾。高さ約80cm、幅約70cm、奥行き35cmの黒色玄武岩に刻まれた碑文は、下部が損壊しているため24行までが判読可能である(図1)。そのうち5行目からは2列に分かれ、種目名と優勝者、優勝者の父名と出自が記されている。まずは、最初の校訂者であるケーネンによって復元されたテキストを掲載し、前書き部分を試訳する⁵⁾。

【本文】

βασιλεῖ Πτολεμαῖοι Σωτήρων Ἡράκλειτος Λεπτίνου Ἀλεξανδρεὺς
ἀγνοηθεῖσας καὶ πρῶτος ἄθλα προθεῖς χαλκῶματα,
ἔτους ὀκτωκαιδεκάτου Δύστρου δωδεκάτη γενεθλίῳς

4 Βασιλεία τιθέντος Ἀμαδόκου, τὴν ἀναγραφὴν τῶν νικόντων

図1 バシレイア競技会優勝者録碑文



出典：Bernand, A. (1981) *Recueil des inscriptions grecque du Fayoum*, t.3, Caire, 1981, pl.42.

	σαλπικτάς	παῖδας πυγμῆν	
	Θεόδωρος Στράτωνος Θραῖξ	Χρῦσερμος Ἀμαδόκου Θραῖξ	
	κήρυκας	πτολεμαϊκούς	
8a	Ἰφαιστιών Δημέου Ταραντίνος	Δημήτριος Ἀρτέμωνος Ναυκρατίτης	8b
	λαμπάδι ἀπὸ πρώτης	ἀγενεῖους	
	Πτολεμαῖος Ἀμαδόκου Θραῖξ	Στράτιππος Μειοίτου Μακεδών	
	λαμπάδι	ἄνδρας	
	Διονύσιος Στεφάνου Ἀλικαρνασσεύς	Βαστακίλας Ἀμαδόκου Θραῖξ	
	παῖδας δόλιχον	πτολεμαϊκούς παγκράτιον	
	Αἰνήσις ⁶⁾ Παταμούσου Θραῖξ	Ἀμάδοκος Σατόκου Θραῖξ	
	ἄνδρας	ἀγενεῖους	

16a Πτολεμαῖος Βουβάρου Μακεδών παῖδας στάδιον	Στράτιππος Μεινοῖτου Μακεδών ἄνδρας	16b
Πτολεμαῖος Ἀμαδόκου Θραῖξ πτολεμαϊκούς	Πτολεμαῖος Ἀδύμου Μακεδών ὀπλίτην	
20a Κινέας Ἀλκέτου Θεσσαλός ἀγενεῖους	Μνησίμαχος Ἀμεινοκλέους Βοιώτιος ἵππων λαμπρῶν	20b
Κινέας Ἀλκέτου Θεσσαλός ἄνδρας	Πτολεμαῖος Ἀμαδόκου Θραῖξ ἀβόλοι στάδιον	
24a [.....] Παρμενίωνος Μακεδών [παῖδας δί]αυλον	Λυκομήδης Κτησικλέους Σάμιος τελείων	24b
-----	Α [.....]....[— —]	-----

【試訳】

「プトレマイオス王，ソーテール（救済）神の息子に。アレクサンドレイア市民レブティネースの息子ヘーラクレイトスが，競技会のアゴーノテテースをつとめ，青銅の皿を1位のものに賞品として提供した。

（プトレマイオス2世の治世第）18年（紀元前267年），デュストロス月12日のゲネトリアに，アマドコスがバシレイア祭を開催し，（各種目の）優勝者の記録を（建立した）。」

この後6行目以降には，バシレイア競技会の開催種目と年齢部門ごとに，優勝者21名が父親の名（patronym）と，その祖先または彼ら自身の出身都市やエスニシティとともに記されている。

碑文の冒頭部分で奉献の対象である王は，ソーテール（救済）神，つまり神格化されたプトレマイオス1世の息子と記載されていることから，プトレマイオス2世と考えると問題はない。それによって碑文の建立年代も容易に解明できる。碑文には治世第18年とあり，プトレマイオス2世の治世18年は紀元前267年に相当することから，バシレイア祭がこの年に開催され，その競技会の結果を受けて建立されたことになる。

碑文の前書き部分はわずかな記述であるが，そこから得られたバシレイア祭についての情報をまとめておきたい。開催年代とともに記された開催の日付は，デュストロス月

12日であった。デュストロス月はプトレマイオス朝時代に使用されていたマケドニア暦の月名であり、その12日は現在の暦では3月8日に相当する⁷⁾。この日付の後に続くゲネトリアは「生誕日」を意味するが、与格(γενεθλίου)で記されている。校訂者であるケーネンが解釈するように、バシレイア祭はプトレマイオス2世の誕生日(ゲネトリア)に開催された祝祭として理解されるべきである⁸⁾。

以上のように内容は明快であるため、先行研究においても解釈をめぐる相違はそれほどみられない。しかし、碑文のもともとの建立地と、碑文4行目の解釈については現在も一致を見ていない。

まず、優勝者録碑文の建立地について、ケーネンはファイユーム地方を候補として挙げている⁹⁾。これについてはロベール夫妻やビンゲンをはじめとする研究者たちも同意し、バシレイア競技会をギリシア系の入植者がファイユーム地方のどこかで開催した競技会と見なしている¹⁰⁾。一方、フレイザーは石碑の材質に注目し、ファイユームではなくメンフィスなど中部エジプトを建立場所としている。彼によると、優勝者録の石材として黒色玄武岩が用いられているが、このような傾向は中部エジプトに限定されるという¹¹⁾。だが、フレイザーの主張は興味深いものの、材質の調達場所と建立場所が異なる可能性も考えられる。碑文の建立地についての情報がこれ以上得られないため、その特定は不可能であり、ここではケーネンらの指摘する通り、バシレイア競技会の優勝者録碑文の建立地はギリシア人入植者の多いファイユーム地方と考えるべきであろう。

次に、碑文4行目の解釈について、ケーネンは Βασιλεία τιθέντος Ἀμαδόκου, τὴν ἀναγραφὴν τῶν νικόντων と最初の3語をひとくくりの文節ととらえた。そして前半部分を「アマドコスがバシレイアを開催した」と解釈し、後半部分の τὴν ἀναγραφὴν τῶν νικόντων 「優勝者の記録を」について、「建立する」に該当する動詞は省略されたとするものの、行為の主体者を同じくアマドコスとした。従って、彼の解釈によると、バシレイア競技会の開催者と優勝者録の建立者はアマドコスということになる¹²⁾。これに対しエベールは、コンマを Βασιλεία と τιθέντος 間に置く解釈を提示し、Βασιλεία, τιθέντος Ἀμαδόκου τὴν ἀναγραφὴν τῶν νικόντων という解釈を提示した¹³⁾。エベールの解釈では、「主催する、開催する」を意味する τιθέντος の主語がアマドコスであることに変わりはないが、その目的語は τὴν ἀναγραφὴν τῶν νικόντων 「優勝者たちの記録」となる。その上で、彼はバシレイア祭競技会の開催者をアレクサンドレイア市民レプティネースの子ヘーラクレイトス、アマドコスを優勝者録の建立者と解釈したのである。

古代ギリシアにおいて、通常体育競技会の運営にあたったのはアゴーノテテースとい

う公職者である。アゴノテテース職は、紀元前4世紀以降ギリシアの諸都市で設置されたことが確認されるが、おもな役割は都市の体育競技会を開催、運営することであった¹⁴⁾。バシレイア祭優勝者録においても、ヘーラクレイトスがアゴノテテースを務めたと記録されていることから、賞品の提供だけでなく競技会の一切を取り仕切ったと理解するのが妥当である。ところがケーネンの判読に従うと、アマドコスもバシレイアの開催者となる。だがアマドコスが共同の開催者であるならば、碑文冒頭にヘーラクレイトスと併記されるべきである。競技会の主催者と優勝者録碑文の建立者が別の人物で、後者が碑文末に記録される事例は、紀元前4世紀末以降ギリシアの各地で確認することができる¹⁵⁾。それ故、アゴノテテースであるヘーラクレイトスを競技会的主催者とし、アマドコスを優勝者録碑文の建立者とするエベールの解釈は十分に説得力を持つように思われる。

しかし、エベールの読みに従うことにより、バシレイア競技会の優勝者録碑文について新たな問題が生じる。競技会の優勝者録碑文の建立は本来アゴノテテースであるヘーラクレイトスの任務であるが、なぜアマドコスなる人物が、おそらくファイユーム地方に優勝者録碑文を建立したのか。アマドコスにとって、バシレイア競技会の優勝者の記録を残すことが重要だったのだろう。そこで次章では、体育競技会が開催されたバシレイア祭について考察する。

2 プトレマイオス朝とバシレイア祭

プトレマイオス2世の誕生日を祝うバシレイア祭についてはさまざまな史料から確認できるが、年代が確定できるもののうち最古のものは、紀元前250年頃に布告されたアレクサンドレイアの市法である。その中で免税特権を付与された人びとのなかに、「アレクサンドロスの祭典とプトレマイエア祭、バシレイア祭の競技会で優勝した人びと」が含まれている¹⁶⁾。バシレイア競技会の優勝者たちが免税特権を付与されたという記述は、この祭典で競技会が開催されていたことの証左ともなる。アレクサンドレイアのバシレイア祭はエジプトから出土した史料だけではなく、アテナイから出土した紀元前3世紀末頃の体育競技者ニコクレースの優勝記録一覧碑文にも言及される。同碑文には、ニコクレースが優勝したギリシア各地の競技会が記録されているが、デルフォイのピュティア競技会やイストミア競技会、パンアテナイア競技会などの全ギリシア的に名声を認められた競技会とともに、アレクサンドレイアのバシレイア祭も含まれている¹⁷⁾。つまり、

バシレイア競技会は、ギリシアの各地からの参加者も含む、全ギリシア的な競技会としても認識されていたのである。

しかし、前章で述べたように、バシレイア祭の競技会はファイユームで開催されたと考えられてきたため、その開催地をめぐる矛盾が生じることになる。そのため、中部エジプトのバシレイア競技会は、アレクサンドレイアで開催されたバシレイア競技会の「地方版」として開催されたと理解されてきた¹⁸⁾。紀元前267年の優勝者録に記載されたバシレイア競技会が、王宮の存在するアレクサンドレイアで開催されたギリシア世界に名声を及ぼした競技会か、または先行研究が指摘するようにファイユームで行われた地域的な祝賀行事の一環であるかを明確にすることは困難である。ただし、優勝者たちがエジプトへの入植者ばかりであることから、本稿では先行研究に従い、紀元前267年のバシレイア競技会を、ファイユームのギリシア系入植者たちがプトレマイオス2世の誕生日を祝って開催した競技会と理解する。

バシレイア祭自体の起源ははっきりしていない。しかし、ヘレニズム時代以前から、ギリシアの各地で同名の祭典が行われていたことが出土碑文から確認できる。なかでもボイオーティア地方でゼウス・バシレウスに捧げられた祭祀がよく知られている。これは紀元前371年のレウクトラの戦勝を記念してテーバイを中心に創設された祭典であり、実際に祭儀のひとつとして体育競技会が行われていた¹⁹⁾。ただし、紀元前3世紀前半のプトレマイオス朝とボイオーティアの諸都市の関係は特に密接なものではなく、同王朝がわざわざボイオーティアの祭祀をエジプトに導入したと考えるべきではない。また、優勝者の一覧においてもボイオーティア人はわずか1名しか確認できず、ボイオーティアからの入植者による創設の関与も推測しにくい。

プトレマイオス朝諸王の誕生日と即位記念日の儀礼を、アレクサンドロス大王のエジプト征服にさかのぼる見解も存在する。アッリアノスによると、アレクサンドロスは紀元前332年にメンフィスにおいて、ゼウスへの犠牲式とともに体育と音楽の競技会を催した²⁰⁾。この時のアレクサンドロスの競技会挙行について、アッリアノスはその理由を伝えていないが、伝カッリステネス『アレクサンドロス大王伝』によるとアレクサンドロスはメンフィスで王朝時代からの伝統に則って即位儀式を挙行了という²¹⁾。ケーネンらは、その記述をもとに、バシレイア祭の起源をアレクサンドロス大王がエジプト滞在中に、ゼウスに対する供犠として、またファラオとしての即位を記念して開催した競技会にさかのぼり、その後継者となったプトレマイオス1世にも受け継がれたとする²²⁾。アッリアノスの記述がわずかであることや、カッリステネスの記述については信憑性に

疑問もあるため、即位儀礼とギリシアの競技会を結びつけてバシレイア祭の起源と断定することはできない。ただし、メンフィスにおいて王朝時代の即位式が挙げられていたことや、ギリシア系の入植者が競技会を開催していたことから、この近隣地域でプトレマイオス朝の王朝祭祀が行われていたことは十分に推測できよう。

プトレマイオス朝時代のエジプトから出土した他の史料にバシレイア祭が言及されている事例はわずかながらも存在する。それは、紀元前248年にゼノンからクリノンという部下にあてた書簡である²³⁾。そこではバシレイア祭で催される饗宴に使用するために、ゼノンが食材の調達を命じている。ゼノンはプトレマイオス2世時代の宰相アポローニオスの家宰であったことで知られている人物であるが、彼のような人物がバシレイア祭の準備に携わっていたことは、プトレマイオス朝の高官がこの祭典を重視していたことを示唆する。

また、バシレイア祭でも饗宴が行われていたことは示唆に富む記述である。プトレマイオス朝に関する祝祭で競技会と饗宴を含んでいたことが確認される祭典には、プトレマイオス2世が両親をソーテーレス神として神格化し4年に一度挙行した王朝祭祀であるプトレマイエア祭がある。プトレマイエア祭は、オリュンピア競技会と同じ構成と国際的な名声を付与されたプトレマイオス朝による王朝祭祀である²⁴⁾。バシレイア祭もプトレマイオス2世の誕生日の記念行事として開催されたことから、王朝祭祀として創設された祝祭のひとつと見なされるべきである。そうすると、バシレイア祭の体育競技会の優勝者に免税特権を付与した王朝の政策の意図も理解できよう。

以上、わずかな史料を考察した結果、バシレイア祭はプトレマイオス2世の誕生日を祝う王朝祭祀であり、その儀式の一環として体育競技会が開催されていた。バシレイア祭の創設年代を明らかにすることはできないが、おそらくプトレマイオス朝初期には、当初は王の即位に関する儀式として行われ、後に王の誕生日を祝賀するようになったと思われる。同祭典は王宮のあるアレクサンドレイアで幅広くギリシア各地からの参加者を招いて挙行されただけでなく、同時にエジプトの各地でもギリシア系入植者を中心に祝われていた。おそらく紀元前267年の優勝者録碑文は、ファイユームにおけるバシレイア競技会の記録である。この競技会における優勝者とともにその主催者を記録することは、王への忠誠を示すことになったと思われる。では、体育競技会に参加し、王への忠誠を示そうとしたのはどのような人びとだったのだろうか。また、碑文を建立したアマドコスとはどのような人物だったのか。

3 競技会の優勝者たち

先行研究によると紀元前 267 年のバシレイア優勝者リストに掲載された人びとは、ほとんどが軍事植民者としてエジプトにやってきた人びとであった。優勝者やその父祖の出自も多様であり、トラキア、マケドニア、ギリシアのテッサリア地方やボイオーティア地方、エーゲ海島嶼部、小アジア、そしてエジプトと地中海全域に広がっている。

バシレイア祭競技会の優勝者とその父親については、ケーネンも簡単な考察を行ない、彼らがプトレマイオス朝の高位公職者や大土地所有者など社会的に高い地位を占める層であると指摘している²⁵⁾。彼の所説については、先行研究も同意するところであるが、十分に論拠を提示しているとは思われず、さらに考察の余地も残されているように思われる。本章ではケーネンの指摘したふたつの点について、再度優勝者の出自を検討し、初期プトレマイオス朝治下のエジプトにおけるバシレイア競技会の意義についてあらためて考察したい。

3.1 バシレイア祭競技会における優勝者

ここでは 4 人のマケドニア人、6 人のトラキア人、ボイオーティア、テッサリア、サモス、ハリカルナッソス、タレントゥムの出身者がそれぞれ 1 名ずつ勝者として掲載されている。優勝者とその父親のほとんどについては、他の出土史料において確認することはできず、その社会的地位について知ることはできない。ここでは 2 人の人物について考察する。

1 人は、スタディオンの優勝者、テッサリア人アルケタスの息子キネアースである(優勝録碑文 20 行 a, 22 行 a)。この人物は、紀元前 263/2 年のアレクサンドロス大王とテオイ・アデルフォイの神官を務めた、アルケタスの息子キネアースと同定されている²⁶⁾。アレクサンドロス大王はプトレマイオス 1 世によって紀元前 290 年頃、王国内の各神殿に合祀され祭儀が制度化されたが、それを統括するためにアレクサンドレイアで神官職が創設され王朝高官やその子弟が 1 年ごとに神官を務めた。その後紀元前 270 年までに、プトレマイオス 2 世は自身と彼の妃アルシノエ 2 世を神格化してテオイ・アデルフォイ(姉弟神)を創設し、アレクサンドロス神に合祀した。その際に、アレクサンドロスの神官と兼職する形で、テオイ・アデルフォイの神官職が創設された²⁷⁾。キネアースは紀元前 267 年のバシレイア競技会でプトレマイコイの部門で優勝している。同競技会の年齢部門については次章で考察するが、紀元前 263/2 年に神官職に就任した時は

19～22歳になっていたはずである。彼が若くして王朝祭祀神官のような公職に登りつめることができたのは、彼の父であるアルケタスが王朝の高官であったか、または大土地所有のクレルーコスであったためであろう。

バシレイア祭の優勝者の中で他史料にあらわれるもう一人の人物は、若駒競争で優勝した、サモス人クテーシクレースの子リュコメーデースである（優勝録碑文24行b）。紀元前3世紀中ごろのものとされる、エジプト南部の都市プトレマイスにおいて行われた顕彰決議は、クテーシクレースの子〔・〕コメーデースに対して行われたものである²⁸⁾。決議の理由は明確ではないが、被顕彰者のプトレマイス市に対する貢献によるものである。被顕彰者が〔リュ〕コメーデースと復元され、先行研究が指摘するように決議の年代が紀元前245年ごろならば、両者は同一人物である可能性が高い。というのも、バシレイア競技会の若駒競争には年齢区分はないが、他の競技参加者の年齢から考えるとリュコメーデースは紀元前267年当時10代から20代前半と推測できるからである。

しかし、プトレマイスにおける〔リュ〕コメーデースは、バシレイア祭優勝者録のリュコメーデースと父名は一致するものの、プトレマイスの市民であり、サモス人という出自は記載されていない。プトレマイス市から出土した顕彰決議はそれほど多く事例が確認できないが、被顕彰者の多くはプトレマイス市の市民である。例えば、紀元前278/7年にプトレマイス市の評議会員たちは民会から顕彰されているが、彼らには父名が記されているのみでその出自についての記載はなく、プトレマイス市の組織であるデーモスが記されている²⁹⁾。同様に、紀元前276/5年にプトレマイスの民会によって顕彰決議の対象とされたプトレマイオスの子リュシマコスも、同市のソストラトス・デーモスに属すると明記されている³⁰⁾。

このように、バシレイア祭競技会碑文にあらわれるリュコメーデースと、プトレマイス市の被顕彰者である〔リュ〕コメーデースが、同一人物であるとは必ずしも断定できない。しかし、プトレマイス市は、プトレマイオス1世のエジプト支配後に建設された都市である。おそらく紀元前3世紀のこの時期においても、都市としては発展段階にあり、新たな市民を迎え入れる余地があった³¹⁾。それ故、リュコメーデースはサモスからの入植者の子孫として、バシレイア祭の競技会に参加し優勝した後、プトレマイスに居住したか、または同市の市民権を得た可能性も考えられる。

以上、わずかな事例ながらもバシレイア祭の入植者について、他の史料から特定できそうな2例を検討した。その結果、彼らが後にプトレマイオス朝の高位公職者や、地域社会に影響を及ぼしうる存在となったことが確認できた。このことから、バシレイア祭

の競技会に参加し優勝した人びとの中には、入植者の中でも有力な家系に属していたものがいたと指摘できる。

3.2 バシレイア祭競技会におけるトラキア人

優勝者たちの出自を概観するとトラキア人が8種目で6人が優勝し、最多を占めている。なかでも注目すべきは、松明競争とスタディオン走パイデスの部、馬術訓練の優勝者、トラキア人アマドコスの子プトレマイオスであるが（優勝者録10行a, 18行a, 22行b）、これらは同一人物の可能性が高い。

トラキア人は紀元前5世紀以降、アテナイやスパルタとの交流やエーゲ海北部へのギリシア人の入植を通してギリシア化が進んだとされている³²⁾。紀元前4世紀後半にはマケドニアがトラキアに進出し、アレクサンドロスの遠征軍にも多くの将兵が参加していたことが確認できる³³⁾。その後も後継者戦争期には傭兵として従軍し、ヘレニズム時代に各地に入植した³⁴⁾。

ヘレニズム時代になると、多くのトラキア人がエジプトに入植した。これについてはプトレマイオス3世が第3次シリア戦争の戦果によりトラキアのエーゲ海沿岸部が王国の領域に組み込まれ、その結果トラキア人のエジプトへの入植がすすんだためと理解されてきた³⁵⁾。しかし、バグナルやステファノスのエジプト入植者の出自にかんする統計的研究によると、トラキア人のエジプトへの入植はアレクサンドロス大王のエジプト占領にはじまり、以後プトレマイオス朝のエジプト支配が確立した後は傭兵として編入したトラキア人がエジプトへ入植するようになったという³⁶⁾。エジプト中部のバシレイア祭競技会で優勝したトラキア人たちも、初期プトレマイオス朝時代に入植したトラキア人の子弟である。トラキア人の多くは、エジプト中部、ファイユーム地方のアルシノエー県への入植が最も多く確認され、ついでヘラクレオポリス県、オクシュリンコス県が多い³⁷⁾。付言すると、このことは碑文の出土地がファイユーム地方である可能性が高いという指摘と一致するものである。

競技会の記録碑文を建立したアマドコスは、松明競争とスタディオン走のパイデスの部、馬術訓練で優勝したプトレマイオス、ボクシングのパイデスの部で優勝したクリュセルモス（優勝者録6行b）、ボクシングのアンドラスの部で優勝したバスタキラス（優勝者録12行b）という3人のトラキア人の父と同名である。ヘレニズム時代を通し、アマドコスという人名はほとんど確認されないため³⁸⁾、優勝者録にあらわれるアマドコスはすべて同一人物であると考えられる。それに加えて、パンクラティオンのプトレマイ

コイの部で勝利したトラキア人サトコスの子アマドコス（優勝者録14行b）も、優勝者録の建立者アマドコスの一族である可能性が高い。つまり紀元前267年のバシレイア競技会では、アマドコスとその一族が中心的な役割を果たしたということになる。

ケーネンは競技会のアゴノテテースをつとめたアレクサンドレイア市民ヘーラクレイトスもアマドコス一族と推定し、一族の家系を紀元前2世紀まで再構成しようと試みている。それによると、紀元前243年ごろのパピルス文書にあらわれる、王朝の高官であり、ファイユーム南部に広大な土地を所有していたヘーラクレイトスの子クリュセルモスなる人物はアマドコスの孫になるという。さらにそのクリュセルモスの子であるヘーラクレイトスを、別の史料から確認できる紀元前3世紀末頃のプトレマイオス朝宮廷の有力者であるとし、さらにその子のクリュセルモスについて、紀元前2世紀初めにデロスにおいてプロクセノスの特権を付与された人物と同定しているのである。その上でケーネンはヘーラクレイトスの出自をトラキア系とし、すでにこの時期にはアレクサンドレイアの市民権を獲得していたと推測している³⁹⁾。ケーネンによるヘーラクレイトスの子孫の再構成は、それぞれの世代間の差が適切で、それなりに説得力を持つが、本人も不確実性を認めているように、同名の人物が同時期のエジプトに存在していた可能性を考慮すると、完全に受け入れられるとは言い難い⁴⁰⁾。

しかしながら、アマドコスの一族から優勝者を多く輩出したことは、彼らがこの地において富裕層に属していた可能性を導き出す。前節で検討したように、バシレイア競技会に参加した者たちの中には、大土地所有者や後に王朝の高官となった人物も含まれていたためである。エジプトに入植したトラキア人は、マケドニア人やギリシア系の入植者に比べ割り当てられた土地も平均40～80アルーラと少なかった⁴¹⁾。それに対し、一族の子弟をバシレイア競技会に出場させたアマドコスは、比較的大土地を所有していたと考えられる。先行研究は、バシレイア祭の優勝者碑文をトラキア人のギリシア化を示す史料として強調するが⁴²⁾、ヘレニズム期のエジプトにおけるトラキア人の比較的低い社会的地位を考えると、ギリシア系の入植者と競い、数多くの種目で優勝を手にした息子たちはアマドコスにとって誇らしい存在であったに違いない。それを記録するために、彼は優勝者の一覧碑文を建立したのである。

アマドコスの一族に限らず、バシレイア祭のような王朝が特別視した競技会で優勝することは、優勝者によって非常に重要なことであった。それは、彼らが免税特権を与えられていたことから明らかである。換言すると、プトレマイオス王朝が体育競技会の優勝者を重視していたということになる。なぜプトレマイオス朝が彼らを重視したのか。

その問題を考えるために、次章ではバシレイア競技会の競技種目と、それぞれの種目に設けられた年齢区分について考察してみたい。

4 バシレイア祭競技会の年齢区分と種目

バシレイア競技会優勝者録碑文では、競技種目として13種目が開催され、うち5種目についてはそれぞれ年齢による区分が設けられていた。碑文の26行目以降が欠損しているため、他にも競技種目が開催されていた可能性がある。これらの競技のほとんどが、ギリシア本土におけるオリュンピア祭や、デルフォイのピュティア祭、中部ギリシアにおけるイストミア、ネメアの競技会などの、全ギリシア的な競技会において同時期に開催されていた種目と同じものである⁴³⁾。

では、ギリシア系入植者やプトレマイオス王朝は、ギリシアの伝統として定着していた競技会を、ただ彼らの文化的な習慣との理由だけでエジプトに導入したのであろうか。おそらく体育競技が王朝にとって有益なものであると認識されていたに違いない。そこで本章では、バシレイア競技会優勝録の競技種目や年代区分について考察し、これらが設けられた目的を明らかにしたい。

4.1 バシレイア競技会の開催種目

バシレイア祭の競技会では、体育競技と馬術競技が開催されていたと指摘したが、それ以外にも2種目が行われ、優勝者が記載されている。それはσαλπικτάς「トランペット」とκήρυκας「伝令」である。

σαλπικτάς「トランペット」は優勝者録冒頭に記載され、トラキア人ストラトーンの息子テオドーロスが優勝し（優勝者録6行a）、次いで記録されるκήρυκας「伝令」では、タラスのデーメアースの息子ヘーファイスティオン（優勝者録8行a）が優勝している。これら2種目はオリュンピア競技会において、紀元前396年にはじめて種目が設置され⁴⁴⁾、その後、ギリシア各地の体育競技会でも競技が行われるようになった⁴⁵⁾。κήρυκας「伝令」については、ヘレニズム時代に各地で創設された競技会で、声の太さと大きさ、明朗さが競われた⁴⁶⁾。このような伝令の特徴は、戦場において重視されてきたため、その競技は軍事的な意義を有していたと考えられる。バシレイア競技会優勝者録碑文でも、σαλπικτάς「トランペット」とκήρυκας「伝令」がリストの最初に挙げられているが、これは全ギリシア的な体育競技会の優勝者を記録した碑文において一般的な傾向といえる。

というのも彼らは祭典の最後において、体育競技の優勝者の読み上げを行うという役割を割り当てられていたためである。

この2種目以下は体育競技の種目の優勝者が挙げられており、松明競争、ドリコス走、スタディオン走、ディアウロス走の短・中距離走と、ボクシング、パンクラティオンなどの格闘技種目、武装競争が開催されていた。これらのなかで松明競争については若干の説明が必要となる。というのも、松明競争は、*λαμπάδι ἀπὸ πρώτης*（優勝者録9行a）とそれに続く *λαμπάδι*（優勝者録11行a、主格形は *λαμπάς*）の2種目でそれぞれ優勝者が記録され、前者はトラキア人アマドコスの子プトレマイオス（優勝者録10行a）、後者はハリカルナッソスのステファノスの子ディオニュシオスが優勝者となっている（優勝者録12行a）。*λαμπάς*「松明競争」は、ギリシアの各地で紀元前4世紀から競技会の種目として開催されてきたことが確認される。しかし、11行目の *λαμπάδι* を松明競争とすると、9行目の *λαμπάδι ἀπὸ πρώτης* と *λαμπάδι* の相違が問題となる。

これら2種目の解釈については、ロドスのエレティミア競技会優勝者録碑文が手掛かりとなろう。エレティミア競技会ではバシレイア祭と同様に *λαμπάδι ἀπὸ πρώτης* と *λαμπάδι* の2種目が開催され、それぞれの勝者が記録されている。エレティミア祭優勝者録碑文の校訂者であるコントリーニは、*λαμπάδι ἀπὸ πρώτης* をリレーの第1走者、*λαμπάδι* を最終走者と解釈している⁴⁷⁾。ケーネン⁴⁸⁾はコントリーニの解釈をそのまま受け入れ、バシレイア祭の競技会でもリレーによる松明競争が行われ、第1走者と最終走者が記録されたとする⁴⁸⁾。バシレイア祭の優勝者録碑文にコメントを加えたロベールも、ケドレアイとサモスから出土した競技会の優勝者録碑文を引用しながらこれに同調した⁴⁹⁾。これに対しゴーティエは、コスから出土した紀元前2世紀の松明競争に関する規定を記録した碑文を校訂し、まったく異なった見解を提示した。それによると、*λαμπάδι ἀπὸ πρώτης* は個人による松明競争、*λαμπάδι* はチームによるリレー競走となる⁵⁰⁾。コントリーニらの推論が競技の詳細について一切記録されない競技会の優勝者記録碑文から導き出されたのに対して、ゴーティエはコス島における松明競争の規則を十分吟味していることから説得力を持つ。それ故ここではゴーティエの解釈に従い、バシレイア競技会の *λαμπάδι ἀπὸ πρώτης* の優勝者プトレマイオスを松明競争の勝者、*λαμπάδι* の優勝者として記録されたステファノスの子ディオニュシオスを優勝したチームの代表者と解釈したい。

松明競争は、ギリシアの諸都市において、体育訓練機関であるギュムナシオンで青少年が忍耐力を試すために開催された⁵¹⁾。諸都市は松明競争の開催の準備や優勝者への賞の提供を行うランパダルコスという官職を設け、この種目を推奨し青少年の鍛錬を図つ

た。しかし、松明競争が各地で一般化するようになるのは紀元前2世紀後半になってからであり、エジプトにおいてもこの時期になってランパダルコスが設けられたことが確認できる⁵²⁾。

体育競技の優勝者の後には、ἵπποι λαμπροῦ「馬術調練」の種目が挙げられ、トラキア人アマドコスの子プトレマイオスが優勝者として記録される(優勝者録22行b)。この種目は、騎乗と馬術の華美を競うものであり⁵³⁾、アテナイの体育競技会のひとつであるテーセア祭において、紀元前2世紀半ばごろから開催されている⁵⁴⁾。馬術種目については、他に若駒競争と成馬競争が開催され、若駒競争ではサモス出身のクテーシクレースの子リュコメデーヌスが優勝したことが記録されているが(優勝者録24行b)、成馬競争の優勝者は欠損により確認できない。

4.2 バシレイア祭競技会における年齢区分

バシレイア競技会では、ドリコス走にパイデスの部とアンドラスの部の2部門、スタディオオン走とボクシングにパイデスの部とプトレマイコイの部、アゲネイオイの部、アンドラスの部の4部門、パンクラティオンにプトレマイコイの部とアゲネイオイの部、アンドラスの部の3部門と、それぞれ年齢部門が設けられていた。バシレイア競技会で設けられていた年齢別の部門は、パイデス、プトレマイコイ、アゲネイオイ、アンドラスの4部門ということになる。

このうち、パイデス、アゲネイオイ、アンドラスについては、イストミア競技会、ネメア競技会、パンアテナイア競技会など、紀元前4世紀までにギリシア各地の競技会でも設けられていたことが確認されている⁵⁵⁾。一般的に、パイデスは14歳以下の年少の部、アゲネイオイは15歳～20歳の青少年の部、アンドラスは21歳以上の成人の部である⁵⁶⁾。

問題となるのは、スタディオオン走、ボクシング、パンクラティオンの3種目で設けられていたプトレマイコイの部門である。優勝者録碑文において、プトレマイコイの部はパイデスの部とアゲネイオイの部の間に記載されており、この両部門を再編する形で設けられた年齢区分と推測できる。プトレマイコイの部のような独自の年齢区分は、ヘレニズム時代に開催された体育競技会においていくつか確認できる。例えば、コス島の大アスクレピエイア祭では、全ギリシア的な体育競技会であるデルフォイのピュティア競技会やイストミア競技会にならない、自都市の競技会に全ギリシア的な名声を付与すべく、パイス・ピュティコス(παῖς Πυθικός)とパイス・イストミコス(παῖς Ἴσθμικός)という区分が設けられ、前者は12歳から14歳、後者は14歳から17歳に区分される⁵⁷⁾。これを

受けてケーネンは、プトレマイコイの部を14歳から17歳の少年たちのために設けられた競技部門とし、以降この見解は他の研究者にも受け入れられている⁵⁸⁾。

バシレイア競技会の年齢部門の区分を解明することにより、松明競争と馬術調練がどの年齢層に開放された競技であったかも明らかになる。前章で考察したトラキア人アマドコスの子プトレマイオスは、この両競技（優勝者録10行a, 22行b）に加え、スタディオン走の少年の部の優勝者（優勝者録18行a）としても記録されている。少年の部は12歳から14歳までの年齢部門であるから、松明競争と馬術調練は少年たちのための競技種目として行われたことになる。

プトレマイコイについては、その名称からプトレマイオス王家にちなんで付けられたと推測できる。ギリシア世界において、競技会が少年の競技部門に王や支配者の名前を付した事例は、さまざまな他の地域や時代から確認できる。例えば、元首政期にイタリアのネアポリスで開催されたセバスタ・ローマイア祭の競技会では、「クラウディウス帝のパイデス」という14歳から17歳までの年齢区分が設けられているが、これは時の皇帝クラウディウスをたたえるために設けられたものとされている⁵⁹⁾。また、トラヤヌス帝時代のスパルタのギムナシオンでは、「アゲシラオスのパイデスたち」（παῖς κρίσεως τῆς Ἀγησιλάου）という年齢部門が設けられていた。アゲシラオスについて詳細は不明であるが、ギムナシオンの長官（Gymnasiarchos）を歴任した人物であろう⁶⁰⁾。また、体育競技の年代区分とは異なるが、紀元前260年頃のシチリア島の都市ネイトンのギムナシオンには、「ヒエロンの若者たち」という若者たちのグループが存在した⁶¹⁾。ヒエロンは当時のシチリアの僭主であるが、特定の年齢の青年団に君主の名前を付けたことは、君主によるギムナシオンへの介入や、青年の体育訓練への関心があったことを示唆するものである。

エジプトにおけるプトレマイコイの事例も、バシレイア祭が君主礼拝のひとつとして開催されたことを考慮すると、王家をたたえるために青少年の年齢区分に王名が付されたと考えるのは不自然ではない。では、プトレマイオス王朝にとって、プトレマイコイの少年たちの存在は、どのように位置づけることができるだろうか。

ここでプトレマイオス2世の妃、アルシノエー2世のための儀礼を参照したい。アルシノエー2世は、兄弟でもあるプトレマイオス2世とともにテオイ・アデルフォイ（姉弟神）として神格化され、王国内で儀礼が制度化されていたが、死後アルシノエー・フィラデルフォス（姉弟愛神）として単独で神格化された。紀元前3世紀の史家サテュロスは『アレクサンドレイアのデーモスについて』において、アルシノエー・フィラデルフォ

スの祭典行列について記述しているが、そのなかに、ギムナシアルコスとエフェーボイが参列していたことを伝えている⁶²⁾。エフェーボイとは、成人とみなされる直前の18歳の男子が1年間ギムナシオンで奉仕する制度であり、ヘレニズム時代のギリシア世界で採用されていた制度であった⁶³⁾。ヘレニズム時代における都市などの儀礼へのエフェーボイの事例の参加は、小アジアなどからも確認される⁶⁴⁾。

バシレイア競技会は、このような儀式への参列を期待された青少年の育成の成果を披露する機会であったと考えられる。再びトラキア人アマドコスの子プトレマイオスの事例に立ち返るが、彼が勝利を収めた馬術訓練は、儀式における騎馬の閲兵式のための訓練の一種と理解されてきた⁶⁵⁾。紀元前251年の日付があるギリシア語パピルスは、騎兵の指揮官であるパニアースという人物から、エジプト中部のアルシノーエ県の行政官アンティパトロスに対し、王の閲兵式に若い騎兵たちが参加するよう要請した書簡である⁶⁶⁾。紀元前3世紀の史家であるロドスのカッリクセイノスは、プトレマイエア祭の祭典行列の中に膨大な数の騎兵のパレードが含まれていたと伝えている⁶⁷⁾。トラキア系軍事植民者の子プトレマイオスらも、王が主催した儀式や、王朝祭祀への参加のために馬術訓練を行っていたものと考えられる。バシレイア競技会のプトレマイコイの青年たちは、祭祀においても祭典行列や儀式への参加など重要な役割を果たしていた少年たちであった。彼らは体育競技の訓練成果を競い合うとともに、プトレマイオス王朝の神格の儀礼においても、重要な役割を果たすべく期待されていたと考えられる。

5 紀元前3世紀前半のエジプトにおける体育競技

第3章で考察したように、紀元前267年のバシレイア祭体育競技会の優勝者たちは、おそらくファイユーム地方に入植した比較的富裕な軍事植民者の子弟であった。次に、エジプトにおける軍事植民者たちにとって、体育競技や体育訓練が有した意義について考察する。

ギリシア諸都市において、市民の体育訓練や軍事訓練が行われた場はギムナシオンであった。紀元前4世紀末以降、ギリシア諸都市でギムナシオン建設が活発となり、ヘレニズム時代を通し市民生活にとって重要な施設となったことは、各地から出土した膨大な碑文史料から確認されている。

エジプトにおいてギムナシオンは、アレクサンドレイアなどのギリシア都市にはプトレマイオス王朝以前から設置されていたようであるが、紀元前3世紀の中頃になると、

エジプト中部のファイユーム地域などで、創設されるようになった⁶⁸⁾。アレクサンドレイア以外の地域で最初にギュムナシオンについて言及された史料は、ファイユーム地方のフィラデルフィア村の騎兵であるネストスによる、紀元前242/1年の嘆願書である⁶⁹⁾。その中で彼は、デーメアースなる人物がギュムナシオンの監督であった時に支払うべき運営資金を、後任のアゲシラオスとピリノスに支払うよう求めている。これを受けて、ハーバーマン、パガニーニらは、この嘆願書の年代を手がかりに、エジプトの村落部におけるギュムナシオンの創設時期を紀元前3世紀の中頃としている⁷⁰⁾。

エジプトの地域社会でギュムナシオンが建設され始めた年代を紀元前250年頃とすると、紀元前267年に開催されたバシレイア競技会はギュムナシオンがエジプト各地で設置されはじめた時期、または設置される前の時期に相当する。つまり、紀元前3世紀中頃のエジプトでは、体育競技会に対する関心が高まっていたと考えることができよう。

このような体育競技会への関心の高まりは、プトレマイオス王朝の文化政策の影響によるものと考えられる。その代表的な事例がプトレマイエア祭の体育競技会である。プトレマイオス2世は、紀元前279/8年のプトレマイオス1世・ベレニケー1世の神格化に際し、オリュンピア競技会を模範とし4年に1度開催されるプトレマイエア祭を開催した。プトレマイエア祭においては、諸島民のコイノンが同祭にオリュンピアの競技会と同等の地位を付与することを承認した決議布告から、体育競技と馬術競技が開催されていたことが確認されている⁷¹⁾。

全ギリシア的な競技会として認知され、ギリシア各地からの参加者を伴ってアレクサンドレイアで開催されていたプトレマイエア祭であるが、エジプトの入植者たちも同祭における体育競技会に参加し、優勝を狙っていたようである。プトレマイオス2世時代の宰相アポッローニオスの家宰ゼノーンに関するパピルス文書には、ゼノードロスなる人物から彼の兄弟であるディオニュシオスが、「聖なる島」で開催されたプトレマイエア祭の馬術競技会で優勝したことを報告する書簡が含まれている⁷²⁾。ディオニュシオスが優勝したプトレマイエア祭は、「聖なる島」で開催されたと記載されているが、アレクサンドレイア郊外に同名の地名が確認されること⁷³⁾、ストラボンがアレクサンドレイア郊外にヒッポドローム（競馬場）の存在を伝えていることから⁷⁴⁾、プトレマイオス2世が紀元前279/8年に創設したプトレマイエア祭と同一の競技会であると推測できる⁷⁵⁾。

上述のゼノーンは、ディオニュシオス以外にも若い体育競技者を支援していた。彼はピュッロスという少年を育成し、彼が「全ギリシア的な」競技会で勝利を得るために練

習に専念できるよう支援している⁷⁶⁾。また、ゼノーンはパニアースという少年にも同様の支援を行っている⁷⁷⁾。クラリッスとファンデルペによれば、ゼノーンが支援を行った体育競技者は、エジプト入植者の子弟であるという⁷⁸⁾。

ゼノーンによる体育競技者の育成は、プトレマイオス王家の全ギリシア的な競技会への関心に関連づけられるかもしれない。初期プトレマイオス朝の君主たちは、オリュンピア競技会やピュティア競技会、イストミア競技会などのギリシア本土の競技会に出場していた。例えば、プトレマイオス1世は紀元前314年のピュティア祭の2頭立て戦車競技で優勝した⁷⁹⁾。また彼の息子のラゴスも、アルカディアのリュカイア祭の競技会優勝者録碑文によると、紀元前308/7年の戦車競技で優勝したことが確認できる⁸⁰⁾。2001年に公刊された、ミラノ大学所蔵のパピルスはペラのポセイディッポスによるエピグラムであるが、このなかにはアルシノエー2世らプトレマイオス朝の君主たちのイストミア競技会での戦車競走の戦勝を記念した祝勝歌が含まれている⁸¹⁾。

プトレマイオス朝の君主たちのギリシアの体育競技会への参加は、競技会での優勝を通しギリシアでの同王朝の政治的プレゼンスのアピールを狙うことが目的であった⁸²⁾。また、レミセンは、プトレマイオス朝がエジプト出身の体育競技者を育成し、オリュンピア競技会やイストミア競技会などのギリシアの高名な競技会での優勝を狙うことを意識していたと指摘する。全ギリシア的な競技会で優勝すると、勝者の出身地の名誉にも言及されるため、エジプト出身者の栄光はエジプトを支配するプトレマイオス朝の名声の高揚にも寄与すると考えられるためである⁸³⁾。

プトレマイオス王家の全ギリシア的な競技会への関心は、王朝が体育競技をアレクサンドレイアで開催し、その競技会—プトレマイエイア競技会、バシレイア競技会—に全ギリシア的な名声を得ようと努めたことから明らかである。プトレマイオス王朝がプトレマイエイア競技会とバシレイア競技会に全ギリシア的な名声を付与した結果が、両競技会の優勝者への免税特権の付与であった。このような王朝の政策は、諸王による体育競技者の保護へとつながった。例えば、プトレマイオス2世は、アルゴス出身のポリュクレイトスとムネシアダスという二人の体育競技者をたたえ、その彫像を寄進している⁸⁴⁾。また、上述したプトレマイエイアとバシレイア両競技会の優勝者への免税特権は、体育教師にも認められており、王朝が体育競技者の育成に熱心であったことをうかがわせる。前述したゼノーンは宰相アポッローニオスの私的な家宰であったが、同時に王朝や行政機構の業務を行っていたことが、その文書の研究から指摘されている⁸⁵⁾。つまり、ゼノーンは王朝の体育競技振興政策の一環として、競技者への支援を行っていたのであ

る。

バシレイア競技会が開催されたのは、王朝の全ギリシア的競技会や、体育競技への関心が高まっていた時期でもあった。すでに考察したように、この競技会に参加した青少年は、ほとんどがエジプトに入植したギリシア系軍事植民者の子弟であり、バシレイア祭は彼らが王朝への忠誠を誓う機会であった。同時に、彼らにとってバシレイア競技会で優勝することはギリシアの各地の競技会への足がかりを得て、自身の競技者としての名声を高めるための第一歩でもあったのである。

お わ り に

紀元前267年のバシレイア競技会は、従来指摘されてきたように、エジプト中部のファイユーム地方の村落でギリシア人入植者によって、プトレマイオス2世の誕生日と即位記念日を祝う祝祭であったと考えるべきである。このことは、優勝者が軍事植民者の子弟であること、碑文のももとの建立地がファイユーム地方である可能性が高いということから導き出される。バシレイア祭は、祭典を創設したプトレマイオス朝によって全ギリシア的祭典という地位を与えられた。以下、紀元前267年のバシレイア競技会優勝者録について、本稿での考察によって新たに提示された点をまとめておきたい。

まず、トラキア人アマドコスが、あくまで個人的な理由で碑文を建立した理由は、地域の競技会における息子たちの勝利を記録するためであったと理解するべきであろう。トラキア人は、ヘレニズム時代において各地で兵士として活動していたが、エジプトにおいても数多く入植したことが確認される。彼らは、他のギリシア系入植者と比べ軍事植民者として少ない土地しか割り当てられなかった。アマドコスにとって、バシレイア競技会における息子たちの勝利は一族の榮譽であるとともに、王朝に対して自分たちトラキア人入植者の能力を十分に証明しうるものであった。

また、バシレイア競技会の開催種目とそれぞれの種目を考察した結果、この体育競技会はおもに少年から青年層を対象とした競技会であった。バシレイア競技会の種目のうち、松明競争や馬術訓練は青少年のために各地のギムナシオンで行われた訓練である。特に馬術訓練は、王朝祭祀や王の面前における騎兵の閲兵式と結び付けられる。バシレイア競技会は、青少年の日ごろの訓練の成果を披露する場や、プトレマイオス王朝への忠誠を示す場だけではなく、青少年の次のキャリアに結び付く機会としても認識することができる。一方でプトレマイオス王朝は、ギリシア系入植者の青少年層を祭祀におい

で重視し、忠誠心を喚起すべく幼少の頃から王朝祭祀の場での教育を振興していた。

バシレイア競技会が行われた、紀元前3世紀中頃におけるプトレマイオス王朝のエジプト支配は、神殿などエジプト人有力層との協調などにより、比較的安定していたと指摘されている⁸⁶⁾。王朝はギリシア系入植者の競技会や王朝祭祀への参加を通して、彼らを統率しようとしたと考えられる。ただし、この時期のエジプトにおける青少年育成は、ギリシア諸都市のようにギムナシオンによって行われていたのではなく、プトレマイオス王朝の体育競技への関心を受けた有力者によって行われていた。このことは、エジプトの地方社会におけるギムナシオンの設立が、バシレイア競技会以降に確認されることから導き出される。紀元前2世紀以降、エジプトの各地に設立されたギムナシオンが、プトレマイオス王朝の地域社会支配の拠点となったことは既に指摘されている⁸⁷⁾。エジプトの各地におけるギムナシオン創設と、それが地域社会における王朝支配の拠点となっていく経緯の解明については、今後の課題としたい。

付記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費；課題番号：JR 15J01467）の助成を受けたものです。

注

- 1) Koenen, L. (1977) *Eine agonistische Inschrift aus Ägypten und frühptolemäische Königsfeste*, Meisenheim am Glan; *Supplementum Epigraphicum Graecum* (以下, SEG と略記) 27, No.1114.
- 2) 例えば, Remijsen, S. (2014) "Greek Sport in Egypt: Status Symbol and Lifestyle," *A Companion to Sport and Spectacle in Greek and Roman Antiquity*, London & Oxford, pp.349-363.
- 3) Méléze-Modrzejewski, J. (1983) "Le statut des hellènes dans l'Égypte lagide," *Revue des Études Grecques* 96, pp. 244-245.
- 4) 同碑文の発見と入手の経緯については, Koenen (1977) S.3; J.et L.Robert (1977), *Bulletin épigraphique* 1977, No.566 に依った。
- 5) なお, 試訳文中の(丸カッコ)部分は, 訳者(波部)による補足である。
- 6) Αἰνῆσις の読みについて, ビンゲンは, Αἰνῆσις を提案している。彼はその根拠として, 前者の名前はトラキア人の人名では確認できないが, 後者は数例確認できることを挙げる。Bingen, J. (2006) "Les thraces en Égypte ptolémaïque," J.Bingen, *Hellenistic Egypt: Monarchy, Society, Economy, Culture*, Edinburgh, pp.83-93. しかし, 本稿で図版として引用したベルナンの碑文集におさめられた同碑文の写真や拓本を見るかぎり, Αἰνῆσις と判読で

きるため、ここではケーネンの読みに従う。

- 7) Bennett, Ch. (2011) *Alexandria and the Moon: an Investigation into the Lunar Macedonian Calendar of Ptolemaic Egypt*, Leuven, pp.170-171.
- 8) Koenen (1977) S.47-63.
- 9) Koenen (1977) S.23.
- 10) J.et R.Robert (1977) pp.436-437;Bingen (2006) pp.86-89, Remijsen, S. (2009) "Challenged by Egyptians: Greek Sports in the Third Century BC," *The International Journal of the History of Sport* 26, pp.246-271.
- 11) Fraser, P.M. (1993) "Thracians Abroad: three Documents," M. Andronikos (ed.), *Ancient Macedonia*, V, Thessaloniki, pp.443-451.
- 12) Koenen (1977) S.4-5. ケーネンの校訂を受け入れたものとして代表的なものは, Austin, M.M. (2006) *Hellenistic World from Alexander to the Roman Conquest:A Selection of Ancient Sources in Translation*, Second Edition, Cambridge, No.294, pp.516-517.
- 13) Ebert, J. (1979) "Zu Fackelläufen und anderen Problemen in einer griechischen agonistischen Inschrift aus Ägypten," *Stadion* 5, S.5-6. なお, 4行目の解釈については, ビンゲンもエバールの判読に従っている。Bingen (2006) p.87.
- 14) Reisch (1893) "Agonothetes," *RE* I-1, col.870-877. ただし, アレクサンドレイアにおいてアゴノテテース職が常設されていたという史料上の証拠はなく, おそらくパシレイア競技会の開催時に設けられた臨時職と思われる。Kennell, K.M. (2006), *Ephebeia: A Register of Greek Cities with Citizen Training Systems in the Hellenistic And Roman Periods*, Hildesheim, pp.5-6.
- 15) 例えばデルフォイのピュティア競技会の優勝者録碑文においても, 競技会の主催者であるデルフォイの公職者は碑文文頭に名前が挙げられ, 優勝者録の建立者は碑文文末に記載されている。Dittenberger, W. (ed.) *Sylloge Inscriptionum Graecorum*, third edition (以下, *Syll*³ と略記), No. 251 M2; No.252 N42. 同様の様式は小アジアのエフェソスに建立された, ギリシア中部のイストミア競技会の優勝者録の事例でも確認できる。Daux, G. (1978) "Décret d'Ephèse pour un vainqueur aux Isthmia et aux Néméa," *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik* 28, pp. 41-47.
- 16) Graeca Halensis (ed.) *Dikaionmata:Auszüge aus Alexandrinischen Gesetzen und Verordnungen in einem Papyrus des philologischen Seminar der Universität Halle mit einem Anhang weiterer Papyri derselben Sammlung*, Beilin, 1913 (以下, *P.Hal.* と略記), col.I.260-265.
- 17) *Inscriptiones Graecae* (以下, *IG* と略記), II/III². 3779.
- 18) Koenen (1977) S. 23; J. et L.Robert (1977) p.437. 近年, ヘレニズム時代の体育競技について論じたラムセンも従来の解釈を受け継ぎ, 中部エジプトにおける競技会は, プトレマイオス2世の同地への行幸の際に開催されたと理解した。Remijsen (2009) pp.248, 258-259.
- 19) *IG* IV. 428; Schachter, A. (1994) *Cults of Boiotia*, vol.3, London, pp.115-117.

- 20) Arr. *Anab.* III, 5, 2.
- 21) Ps. Callisth, I, 34, 1.
- 22) Koenen (1977) S.29-31; Huss, W. (2001) *Ägypten in hellenistischer Zeit 332-30v. Chr.*, München, S.323-324.
- 23) Edger, C. C. (ed.) *Zenon Papyri* (以下, *P.Cair.Zen.* と略記), Cairo, vol. III, No. 59707.
- 24) プトレマイエイア祭については, 波部雄一郎 (2014), 『プトレマイオス王国と東地中海世界: ヘレニズム王権とディオニューシズム』, 関西学院大学出版会, 128-139 頁を参照のこと。
- 25) Koenen (1977) S.23-28.
- 26) Koenen (1977) S.25-26; Clarysse, W. & Van der Veken, G. (1983) *The Eponymous Priests of Ptolemaic Egypt*, Leiden-Boston, p.6.
- 27) 波部 (2014) 62-63 頁。
- 28) Dittenberger, W. (ed.) *Orientis Graeci Inscriptiones Selectae* (以下, *OGIS* と略記), I, No.47, p.74; Austin, M. (2006) pp.516-517.
- 29) *OGIS* I.48.
- 30) *OGIS* II.728.
- 31) Cohen, G.M. (2006) *The Hellenistic Settlements in Syria, the Red Sea Basin, and North Africa*, Berkeley, pp.350-352.
- 32) トラキアは, ギリシア人がトラキア沿岸部に入植した紀元前7世紀以後, 彼らとの接触を通してギリシア化したと指摘される。Zahnt, M. (2015) “Early History of Thrace to the Murder to Kotys I (360BCE),” *A Companion to Ancient Thrace*, Oxford, pp.35-37.
- 33) Berve, H. (1926) *Das Alexanderreich auf prosopographischer Grundlage*, München, I, S. 134-135.
- 34) Dana, D. (2011) “Les thraces dans les armées hellénistiques: essai d’histoire par les noms,” J.-Ch. Couvenhes et al. *Pratiques et identité culturelles des armées hellénistiques du monde méditerranéen*, Bordeaux, pp.87-115.
- 35) Velkov, V. et Fol (1977) *Les Thraces en Égypte grecque-romain*, Sofia, p.97.
- 36) プトレマイオス朝期の軍事植民については, 出土パピルス史料から軍事植民者の人名とその家系, そして植民者の出身地, 所有地の所在とその大きさについて, ウェーベルが作成したプロソボグラフィが有益である。Uebel, F. (1968) *Die Kleruchen Ägypten unter den ersten sechs Ptolemäern*, Berlin. ウェーベルのプロソボグラフィをもとに, バグナルは植民者の出身地を導き出し, 紀元前4世紀末から紀元前145年にかけて, 地中海世界のさまざまな地域からエジプトへの入植が行われたことを確認した。Bagnall, R.S. (1984) “The Origins of Ptolemaic Cleruchs,” *Bulletin of the American Society of Papyrologists* 21, pp.7-20. また, ステファノスはバグナルの統計と説を補足する形で, ウェーベルのデータに加え新たに発見された史料を分析し, エジプトへの入植者を王朝の勧誘による入植と, 個人の自発的動機による入植の2種類に分類した。Stefanos, M. (2013) “Waterborne

- Recruits: the Military Settlers of Ptolemaic Egypt," K.Buraselis, M.Stefanos & D.J.Thompson (eds.) *The Ptolemies, the Sea and the Nile. Studies in Waterborne Power*, Cambridge, pp.108-131.
- 37) Velkov & Fol (1977) p.99.
- 38) Velkov & Fol (1977) p.101.
- 39) Koenen (1977) S.19.
- 40) ただし、ヘーラクレイトスという人名は、紀元前4世紀からヘレニズム時代にかけて、トラキアやマケドニア、ボスフォロスといった地域で確認されるので、ヘーラクレイトスをトラキア系とする可能性は否定すべきではない。Fraser, P.M. & Matthews, E. (eds.) *A Lexicon of Greek Personal Names*, vol.IV, Oxford, 2005, p.155.
- 41) Velkov & Fol (1977) p.99.
- 42) Fraser (1993) pp.443-45.
- 43) Klee, Th. (1918) *Zur Geschichte der gymnischen Agone und griechischen Festen*, Berlin-Leipzig, S.20-42.
- 44) Crowther, N.B. (1994) "The Role of Heralds and Trumpeters at Greek Athletic Festivals," *Nikephoros* 7, 1994, pp.135-6.
- 45) *IG VII*.419, 420, 540, 1667, 1776, 1777, 244, 2727, 2871, 3195, 316, 3197, 4147, 4151 (ボイオーティア地方), *IG II²* 956 (アテネ・テセイア競技会), *SEG XXIX* 452 (テスピアイのエロイティディア競技会), *SEG XXXI*.514 (テスピアイのムーセイア競技会), *SEG XXXIV*.362 (オロポス).
- 46) Robert, L. (1938) *Études épigraphiques et philologiques*, Paris, pp.92-93.
- 47) Kontorini, V.N. (1975) "Les concours des grands Éréthimia à Rhodes," *Bulletin de correspondnce Hellénique* 99, pp. 97-117, p. 109; Dunst, G. (1967) "Die Siegerliste der samischen Heraia," *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik* 1, S.231-238.
- 48) Koenen (1977) S. 9-12.
- 49) *Syll³* No.1067, 14; J. et L. Robert (1977) p.436, No.565.
- 50) Gauthier, Ph. (1995) "Du nouveau sur les courses aux flambeaux d'après deux inscriptions de Kos," *Revue des Études Grecques* 108, pp. 576-585.
- 51) Gauthier, Ph. et Hatzopoulos, M.B. (1993) *La loi gymnasiarchique de Beroia*, Athènes, pp.109-110.
- 52) Schubart, W. & Kühn (Hg.) *Papyri und Ostraka der Ptolemäerzeit* (Ägyptische Urkunden aus den staatlichen Museen zu Berlin VI), Berlin, S.51-52, Nr. 1256.
- 53) Xen.*Peri.hipp.*II.1, XI.1.
- 54) Kennel, N.M. (1999) "Age Categories and Chronology in the Hellenistic Theseia," *Phoenix* 53, p.249.
- 55) Klee (1918) S.43.
- 56) Klee (1918) S.46-51; Frisch, P. (1988) "Die Klassifikation der ΠΑΙΔΕΣ bei den griechischen

Agonen,” *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik* 75, S.231-238. なお、バシレイア祭優勝者録において、スタディオンのアゲネイオイの部、アンドラスの部の優勝者は同じテッサリア人アルケタスの子キネアースとなっている。おそらく彼は20歳であり、両部門への出場が認められたものと考えられる。

- 57) Klee (1918) S.48, Nr.1.1.
- 58) Koenen (1977) S.15-17.
- 59) Moretti, L. (1953) *Iscrizioni agonistiche greche*, Roma, No.72, 14; Suet.*Claud.*11; Cass. Dio.60.6.
- 60) *IG* V.I.19. 9.
- 61) *IG* XIV.240.4.
- 62) Grenfell B.P. & Hunt A.S. (eds.) *The Oxyrhynchus papyri*, No.2465, fr.2.col.1.
- 63) Chankowski, A. (2011) *L'Éphébie hellénistique; étude d'une institution civique dans les cites grecques des îles de la Mer Égée et de l'Asie Mineure*, Paris, pp.383-432.
- 64) *OGIS* 219; Robert, L. (1966) “Sur un décret d'Illion et sur un papyrus concernant des cultes royaux,” A.E.Samuel (ed.) *Essays in Honour of Bradford Welles*, New Haven, pp.175-211.
- 65) Xen. *Peri.hippi.* II.1.
- 66) *Sammelbuch der griechischen Urkunden aus Ägypten* III, Nr.6992.
- 67) Athenaios, *Deiphnosophistai*, V.202e-203a.
- 68) アレクサンドレイアのギムナシオンは、プトレマイオス2世の時代にはすでに創設されていたことが指摘される。Delorme, J. (1960) *Gymnasion: Étude sur les monuments consacrés à l'éducation en Grèce*, Paris, pp.137-139; Fraser, P.M. (1972) *Ptolemaic Alexandria*, vol.I, Oxford, p. 97.
- 69) *Papiri greci e latini* (以下、*PSI* と略記) IV, No.391.
- 70) Habermann, W. (2004) “Gymnasien im ptolemäischen Ägypten,” D.Kah und P.Scholz (Hg.) *Das hellenistische Gymnasion*, Berlin, S.335-348; Paganini, M.C.D. (2012) “The Invention of the Gymnasiarch in rural Ptolemaic Egypt,” P.Schubert (ed.) *Actes du 26^e Congrès international de papyrology*, Genève, pp.595-596.
- 71) *Syll* ³390 ; 波部 (2014) 132-133 頁。
- 72) *PSI* IV, 364.
- 73) *PSI* V, 543.
- 74) Strabo. XVII, 1, 10.
- 75) Remijsen (2009) p.259.
- 76) Skeat, T.K. (ed.) *Zenon Papyri: Greek papyri in the British Museum* VII, London, 1974, No.2017.
- 77) *P.Cair.Zen.* III, No.59326.
- 78) Clarysse, W. et Vandorpe, K. (1995) *Zenon. Un Homme d'agaires grec à l'ombre des*

Pyramides, Louvain, pp. 58-62.

- 79) Paus. X, 7, 8.
- 80) *Syll*³ 314B, 8.
- 81) *Papiri dell' Università degli Studi di Milano VIII : Posidippo di Pella Epigrami (P.Mil. Vogl. VIII)*, G.Bastianini & C.Gallazzi (eds.), Milano, pp.83-99, col.XI 20-XIII 39.
- 82) Van Bremen, R. (2007) "The Entire House is Full of Crowns: Hellenistic Agônes and the Commemoration of Victory," S. Hornblower & C. Morgan (eds.) *Pindar's Poetry, Patrons, and Festivals from Archaic Greece to the Roman Empire*, Oxford, pp.345-375; 波部 (2014) 273-274 頁。
- 83) Remijsen (2009) pp.26-262.
- 84) *SEG* XXX.364.
- 85) Samuel, A.E. (1993) "The Ptolemies and the Ideology of Kingship," P. Green (ed.) *Hellenistic History & Culture*, Berkeley, 1993, pp.168-204.
- 86) Hölbl, G. (2000) *A History of Ptolemaic Empire*, London & New York (translated by T.Saavedra, *Geschichte des Ptolemaërreiches*, Darmstadt, 1994), pp.304-305.
- 87) Habermann (2004) S.343-347.